



LUI「公募研究」成果報告書

研究課題(和文):八旗制を中心とした大清帝国の国制とその形成過程

研究課題(英文):The Structure of Qing Imperial Rule and its formation: Focusing on the Eight Banner system

申請者名・所属先:杉山清彦・総合文化研究科

海外招聘者名:なし

1. 研究の目的

本研究は、ふつう中国王朝と理解されている清朝(1636-1912)を、多民族・広域を統治するユーラシアの帝国の一つ「大清帝国」と捉えて、その統治構造と国家諸制度の特質、およびその成立・展開過程を、国家の根幹をなした軍事・政治制度である八旗制を中心に据えて考察しようとするものである。本研究を通して、近世ユーラシアの複合・広域帝国としての大清帝国の構造理解を進展させ、さらにはモンゴル史や中国近代史、日本近世史などの見直しにもつなげることを志す。

2. 研究開始当初の背景

清朝は、ふつう「最後の中華王朝」とされ、その国家構造や制度は、前近代中国の代表的・典型的なものと理解されている。しかし、この王朝を建国したのは漢人(漢民族)ではなく、マンチュリア(満洲)のツングース系民族であるマンジュ(満洲、旧称は女真)人であった。彼らは、満・蒙・漢を連合させた軍事力と行政組織とによって、広大な領域を版図に収めるとともに、巧みに多民族統治を行なったのである。すなわち、その急拡大と統治の成功の秘訣は、複合性にあったといえよう。

そこで申請者は、この王朝をユーラシアの広域・複合帝国の一つ「大清帝国」と捉えて、漢人とその社会のみを念頭に置いた中国史の文脈からではなく、マンジュ人が建設・運営する多民族帝国という観点から、政治構造・統治制度とその形成過程を解明しようとしてきた。その際焦点となるのが、王朝の軍事力の中核にして、マンジュ人を中心とした支配層の政治・社会組織でもある、八旗と呼ばれ

る組織である。八旗は、国軍主力を構成するとともに、そこに属する旗人たちは、モンゴル・チベット・東トルキスタン・マンチュリアなど非漢人地域の政治・軍事を担い、かつ中央政府の一半を構成して、帝国統治の意思決定とその実行の担い手となった。帝国の国制を捉えるに際し、八旗制に注目するアプローチが有効である所以である。

3. 研究の方法

本研究は、文献学的実証研究と比較史研究とを両輪として展開しようとするものである。具体的には、マンジュ文・漢文の史料を主資料として、歴史学の手法によって、帝国形成期の17世紀を中心に、八旗の組織と旗人の活動に焦点を当てて、制度と実態の双方から、国制とその形成過程に迫るとともに、そのアジア大・世界大の位置づけを図る。

大清帝国の形成過程とその支配構造をめぐることは、拙著『大清帝国の形成と八旗制』(2015)でも見通しを示したが、具体的な肉付けや緻密化はなお途上であり、異論も提示されるなど、大清帝国の国制理解をめぐる研究は、緒に就いたばかりといえることができる。このため、本研究においては、これまで進めてきた国制研究の深化と比較史的展開とを図る。研究は史料の調査・考証と比較検討が主体となるため、単独で実施する。

4. 研究成果

第1回 HMC オープンセミナー

- 題目:マンジュ王朝としての大清帝国:帝国統治と国際秩序
- 日時:2018年9月28日(金) 17:00 - 19:00
- 場所:東京大学東洋文化研究所 第一会議室
- 報告者:杉山清彦(総合文化研究科・准教授)
- ディスカッション:松方冬子(史料編纂所・准教授)
- 概要:清朝は一般に「最後の中華王朝」として捉えられているが、その版図は明代の倍以上に及び、愛新覺羅(アイシン=ギョロ)という特異な姓で知られる君主をはじめ、その構成員は多様な民族からな

っていた。近年、日本をはじめ世界の学界では、非漢人(非漢民族)が頂点に立つ多民族帝国という性格に注目してこの王朝を論じることが一大潮流となっている。そこでこのセミナーでは、そのような学界動向を意識しつつ、この王朝を、「中国史上最後の、かつ典型的な前近代王朝」としてではなく、広域・多民族支配を実現したユーラシア東方の帝国、すなわち「大清帝国」として捉えて、その帝国統治と国際秩序のあり方をまとめてみた。

そのような観点からこの帝国の特質を概括するならば、モンゴル帝国に代表される中央ユーラシア国家と、明朝から引き継いだ中国王朝双方の流れを、前者の系譜の上にあるマンジュ(満洲)人が統合した複合的な帝国であるということが出来る。そしてその帝国形成の原動力にして、運営の主たる担い手となったのが、マンチュリア(満洲)での国家創立期以来の軍事＝行政組織である八旗であり、マンジュ人皇帝は、彼らを手足として広域統治を行ない、対外関係も、一面においてその延長上にあったといえよう。

当日は、日本近世史の松方冬子氏からコメントを頂き、日本近世国家(幕藩制)との、権力形成時期と権力編成のあり方との共通性という符合について、重要な示唆を得た。

第12回 HMC オープンセミナー

- 題目：武人政権として的大清帝国と日本近世国家
- 日時：2019年6月14日(金) 17:00 - 19:00
(入場無料 事前登録不要)
- 場所：東京大学 伊藤国際学術研究センター3階 中教室
- 報告者：杉山清彦(総合文化研究科・准教授)
- ディスカッション：金子拓(史料編纂所・准教授)
- 概要：「近世」の「東アジア」の国ぐにといったとき、ふつう思いうかぶ理解は、日本は武士が全国を分割支配する封建国家、これに対し明・清両朝が支配する中国は、

儒学を身につけた官僚が皇帝のもとで統治に当る中央集権国家という、両者を対照的に捉える見方であろう。

しかし、第1回オープンセミナーで報告したように、日本の近世国家形成と同時期に清を建てたのは、漢人(漢民族)ではなく、彼らはマンチュリア(満洲)のツングース系民族であるマンジュ(満洲)人であった。漢人とは異質ながらも、モンゴルとも異なる民族であるマンジュ人は、八旗と呼ばれる軍事・社会組織に編成されて、その力で旧明領を征服するとともに、その範囲を超えてユーラシア東方に広がる大帝国、すなわち大清帝国を建設したのである。地域的な軍事集団が、覇権競争に勝ち抜く中で国家権力に転成していく——そのように捉えるならば、一見正反対と思われてきた、近世日清両国の支配のありようは、これまでの理解とは異なって描くことができるであろう。

そのような観点に立つならば、マンジュ大清帝国と日本近世国家は、権力編成とその形成過程に注目すると、いずれも地域内の覇権競争の中で形成された、軍事行動を前提とし伝統的主従制に基づく組織が原型となっており、それが恒久的支配の確立と、伝統的権力の継承とによって、自らを統治組織に改変していったものと評することができる。そこでは主従制原理と統治権的原理、主従制と官僚制との並存・融合が見られ、またその権力の組み立てにおいては、君主の強力な指導力と、組織上の分節構造という、一見相反する特徴の並存が見られた。他方、日本が土地を単位とした石高制を確立していったのに対し、マンジュは中央ユーラシア的な人を単位とする組織編成をとったことなど、比較を通して特質の差異も明確に浮かび上がった。

当日は、日本中世史の金子拓氏からコメントを頂き、戦国大名から織豊政権へという流れと対比して、東アジア規模の「近世化」の比較という大きな展望を語っていただいた。一国史に閉じこもらない、世界史に開かれた議論の端緒となったと

いうことができよう。

国制モデルの提示と比較（詳細書誌は5.）

- 大清帝国勃興前史：「ジュシェンからマンジュヘ——明代のマンチュリアと後金国の興起」（特に図2・4）
- モンゴル帝国・大清帝国の国制モデル：『中国と東部ユーラシアの歴史』第7・8・9章（特に図7-2・4、8-4、9-2・3・4）
- 中央ユーラシア国家の支配構造：「人びとの「まとまり」をどうとらえるか——歴史の中の国家と地域」（特に図4-3）
- 比較武人政権論：「近世東アジアの二つの武人政権——大清帝国と織豊政権・徳川幕府——」；「コメント シンポジウム「世界史の中の武人」によせて」
- 研究目的・方法で謳った、実証研究と比較研究の交叉による、国制研究の深化と比較史的展開について、これらの論著において、見通しを語るとともに概念図などの形でモデルを提示した。

5. 主な発表論文等

〔図書〕

- 「ジュシェンからマンジュヘ——明代のマンチュリアと後金国の興起」古松崇志・白杵勲・藤原崇人・武田和哉編『金・女真の歴史とユーラシア東方』（アジア遊学 233）東京：勉誠出版，2019.4，pp. 310-325.
- 『中国と東部ユーラシアの歴史』（放送大学教材）東京：放送大学教育振興会，2020.3（佐川英治・小野寺史郎氏と共著）
- 「人びとの「まとまり」をどうとらえるか——歴史の中の国家と地域」東京大学教養学部歴史学部会編『東大連続講義 歴史学の思考法』東京：岩波書店，2020.4，pp. 58-76.

〔雑誌論文〕

- 「近世東アジアの二つの武人政権——大清帝国と織豊政権・徳川幕府——」『ふびと』（三重大学歴史研究会）第70号，2019.1，pp. 117-150.

〔学会発表〕

- 「「ユーラシアの大清帝国」と「中国の清朝」と——大清国家の歴史的位置——」大阪大学先導的学際研究機構グローバルヒストリー研究部門第81回 Global History Seminar，2019年7月19日（於豊中市・大阪大学）

〔その他〕

- （コメント）「コメント」メトロポリタン史学会第15回大会，シンポジウム「世界史の中の武人——越境と帝国秩序——」，2019年4月20日（於八王子市・首都大学東京：要旨「コメント シンポジウム「世界史の中の武人」によせて」『メトロポリタン史学』第15号，2019.12，pp. 139-143）

*業績には、研究期間終了後に公刊されたもの、他の研究課題の成果と合同になっているものも含む。発表形態の制約などから、本「公募研究」の成果であることを明記できなかったが、いずれもご支援による成果が反映したものであり、深甚の謝意を表するものである。